

## 学生の低学力原因に関する調査研究

### —低学力学生の学習支援方法の開発を目指して—

The Study about product of learning skills for low scholarship student

川廷 宗之<sup>1</sup>, 細谷 夏実<sup>2</sup>, 斉藤 豊<sup>3</sup>, 八城 薫<sup>3</sup>

<sup>1</sup>人間関係学部人間福祉学科, <sup>2</sup>社会情報学部社会情報学科, <sup>3</sup>人間関係学部人間関係学科

キーワード：大学生, 低学力, 行動様式, 学習支援, 能力開発

#### 1. 研究の目的

最近の学生達の学力低下現象はかなり酷い。その低学力学生の学力低下原因については、概括的には、親の経済力との相関や、成育歴上の諸問題などを指摘する様々な見解（内田樹「下流志向」講談社など）など諸説ある。が、学生達の基礎的力そのものが低学力に結びついているという指摘は障害児を除き、殆ど見られない。（大妻の学生にはこれに該当する学生が多い。）このことは、学習のさせ方や意欲の引き出し方によっては伸びる学生も、低学力と呼ばれる学生の中に相当数含まれていることを意味する。この伸ばせは伸びる学生をどのような方法で発見し、どう伸ばしていくか、その教育技法を開発することが本研究の最終目的である。

なお、この研究の背景には、比較的優秀な学生を含めて全般的に学生の低学力化が進みつつある現象があげられる。それもあって、特に中間層以下の学力低下ははなはだしく、中には高等教育機関の学生としての学習にはとても付いていけないと思しき学生も少なくない。しかし、現実にはそういう学生もいるのであるから、これらの学生の指導方法の開発は喫緊の課題となっている。

#### 2. 活動実施報告

そのためには、まず、低学力学生の学力低下原因を、丁寧に分析してみる必要がある。しかし、今までのところ、学生の学習力量が具体的にどのような因子を経由して低学力につながるのかと言う、きわめて現実的具体的研究は余り行われていない。

本研究は、とりあえず、低学力の現実的具体的な誘因を学生の生活状況や、被教育体験での様々な状況から見出すべく、主に1年生の行動傾向調査と、実際の学生の学習支援の実験的試行を行っ

た。

##### (1)行動傾向調査内容

第1回目の研究として行うこの調査では、学生の外的行動から、低学力学生を発見できるはずであるという仮説のもとに、学生の授業への参加時などの行動傾向と、成績の相関を調べた。考慮した学生の行動は、1 資料をもらうか 2 休んだ時の友人 3 ノートの用意 4 図書館の利用 5 授業に遅刻 6 配布資料の持参 7 黒以外の筆記用具 8 教員との食事回数 9 学生相談センター 10 授業中の私語 11 教員との会話 12 文房具の持参 13 高校迄の教職員 14 授業で居眠り 15 教科書の購入 16 配布資料の活用 17 授業の予習 18 高校までの友人 19 大学事務の応援 20 教室の出入り 21 教科書の持参 22 隣に座る友人 23 授業外の学習 24 授業中の飲食 25 学外の友人 などなどに関するものとした。学力については、質問票内に10問の問題を含ませることで、その採点結果をこの調査では学力として整理した。

なお、この調査は、研究上の倫理に反しないように、学力向上を支援する調査として学生に協力を求めた上で行われた。

##### (2)調査結果

この調査の結果、学力と相関が明確の認められる外的因子は、○教科書の購入 ○配布資料の活用 ○教室の出入り ○授業中に飲食 などの行動との関係であった。当然な結果ではあるが、当初考えていた、ノートの取り方や友人による授業サポートや教員とのコミュニケーションや図書館の利用状況などは、相関因子としては出てこなかった。ただし、選択肢の設定の仕方もあり、どれが理想的な行動かはある程度学生にわかってしまうため、回答が自分の現実行動ではなく、そうありたいモデルとしてのあるべき姿で答えてしま

っていると推定されるケースもあり、明確な結論として整理できる段階ではない。

### (3) 低学力学生への働きかけの実験的試行

本研究の第2の実施内容は、低学力と目される学生への働きかけに関する実験的試行である。

この施行では、1年生のほぼ同じ学生を対象に行われた2科目の成績（後期分は途中までの成績）で下位17人（約160人中）の学生を、任意参加を前提と明記して補習学習を行うとして個別に呼びメールで）かけ、授業時間外に、3回にわたってTAボランティアおよび4年生の教職課程の学生によって補習学習を行い、その結果を整理した。

結果的には、17名のうち、欠席がちな8名の学生はこの呼びかけに応じず、実際の参加したのは9名の学生であった。3回のプログラムはまずは学習で困っていることについての聞き取りから始まり、自分が今何をしようとしているのかを「5年後の私・今の私にできること」としてまとめる作業、実際の科目に関する補習（締め切りを過ぎてしまった未提出のレポートの作成、試験対策学習などであった。

### (4) 補充学習の結果

この結果は、このプログラムに参加した9名の学生は成績が向上し、前期科目では参加した全員が当然Cであった（前期科目Dの学生は対象にしなかった。）が、後期科目では内4人がBとなり、試験を欠席しF評価となった学生1名を除き、その他の学生も、きわどいCからBに近いCになるなど補習の成果は明らかであった。なお、参加しなかった7人は、Bが1名、Cが2名で残り5人はDおよびE評価となった。

## 3. 研究目標の達成状況

これらの研究から得られた成果は、アンケート調査の結果からも、補習学習の結果からも、至極当然のなすべきことをしている学生の成績は良い（学力が高い）し、なすべきことをすれば成績は上がる（学力は向上する）という事である。

特に、実験的試行から得られた結果は、たった90分×3回でもそれだけの努力をしたのだから結果的に成績に表れるのは当然だということである。したがって、この結果から言えることの一つは努力をすれば学習は進むのであり、しないから低学力なのだという当然の結果である。

しかし、見逃せないもう一つの要因は、大学の

1年生段階で、この学生たちはどういう学習をしたらよいか解らなかった（テキストにマークをつけて読むことすらできておらず、まして自分でノートを整理し直すなどは、全くできてない）という事である。従ってこれらをそばについてコーチしながらやらせるだけでも効果が発生している。

また、自分ができないという事（たとえばレポートをどう作成していいかわからない、から当然提出できない）に気が付いているのに、その状態を打開しようとはしていないという行動パターンがあることが判明した。解らなければ、教員に聞きに行けば少なくとも何らかの前進があるはずだが、それもしないで、ただただ理解できない授業に出席し、じっと座っているという行動を繰り返していたということである。

今回の実験的試行で学生が最も変わったのは、このパターンでは状況を打開できないことを理解し、TAボランティアの補助を受けながら、個別の教員に実際に質問をし、TAボランティアや先輩の補佐をうけながらレポートに取り組んで遅ればせながらレポートなどを提出できるようになったことである。

## 4. まとめと今後の課題

このような、行動パターンで本来ならできる力量があるにも関わらず、低学力のとどまっている学生は、とりあえずこの研究では、学ぶ努力をすれば低学力を脱出する可能性があることは確認できた。しかし、そういう学生をどう発見し、此処にどう指導すれば伸びるのかはまだ未解明である。また、この研究から、いくつかの仮説の整理は出来たが、対象群が限られており、確かな結論には達していない。したがって、今年度の研究を踏まえて、もう少し内容を深める必要がある。

## 5. 研究成果

### 1) 学会発表

まだ発表できる段階に達していため発表は行っていない。2014年度の大学教育学会で報告予定。

### 2) その他（公開講座・研究会、特許、受賞、マスコミ発表等）

現段階ではなし。